

▽ 教室関係 △

解剖学第一教室

当時の教室員は、国友鼎名誉教授、池田吉人教授、佐藤純一郎助教授、中村定八助教授（休職中）大原裕専攻生、高木直也副手、技術員として小川作郎氏、研究補助の小田文字嬢、傭人の間ノ瀬ツタエ、松本利子嬢それに清掃婦の深井ハツ氏であつた。

被爆時の状況

池田教授、小川、間ノ瀬、松尾、深井の諸氏は教室で、中村助教授は山里町の自宅で高木氏は竹ノ久保町の自宅で被爆す。

国友名誉教授、佐藤助教授、大原専攻生、小田補助員は所用のため当日不在であつた。

池田教授の遺体は十一月経専に於ける追悼式当日、山里小学校上の墓地より発見され、深井氏の遺骨も確認さる。他の教室員も教室内で殉死す。

故池田吉人教授略歴

正四位勲三等医学博士 解剖学教授。

明治三十三年十月十七日兵庫県に生る。

大正十四年三月東北帝国大学医学部卒業。

大正十四年四月同学助手に任ぜられ解剖学を専攻す。

大正十五年四月東北帝国大学助教授に任ぜらる。

昭和三年三月解剖学の研究のため欧米に留學同五年十一月帰朝す。

昭和十二年八月長崎医科大学教授に任ぜらる。

昭和十八年陸軍高等官一等

昭和二十年八月九日大学において原子爆弾の爆発により爆死に殉ず。

主なる研究題目

水晶体の再生に関する発生理学的研究

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	池田吉人
助教授	中村定八
副手	高木直也
技術員	小川作郎
傭人	間ノ瀬ツタエ
"	松尾利子
定婦	深井ハツ

亡き師を懐ふ

解剖学第一教室 佐藤 純 一 郎

(一) はじめに

間もなく八月九日が巡つて来る。

恩師を、同僚を、学生を、幾万の市民を、そしてありとあらゆるものを、文字通りに灰燼に帰せしめた、呪はしい原爆の記念日である。

歳月を重ねて今年はや十周年。追悼記念誌の編纂があるといふ。教室の思出を誌せといふ。

締切の目を気にしながらもペンを執る気持にはなれない。

誌すべく何物も無きが如く感じ、記すべくあまりにも多過ぎるが如く思ひ、また、それにもまして追想すること自体が心の古傷を疼かせるがためである。

受けた打撃はあまりにも強く、その哀しみはあまりにも深すぎるの故である。

(二) 被 爆

あの呪はれた日には、私は戦病死した弟の遺骨受領、葬儀などのために諫早の田舎に居つた。

空高く飛去る敵機を、空襲に馴れきつた身には「またか……」と左程気にもとめずに見送つたその敵機が悪魔の使いであつたのだ。

馳せつけた自分が見出したものは、跡形もない廢墟であり、瓦礫のみとなつた教室であつた。

そして尙も燃えつゞける書庫の煙を唯呆然と見つめるのみであつた。

蠢く被災者たちの焼け爛れ、切り裂れた肉片は襪襦布を身に纏つたかの如く、蒸焼になつたであらう焼屍体の群は豚の丸焼を想はせた。

溝という溝を埋めつくした屍体の数々、

裏山の畑に声も無く蹲つた頻死の人々と屍体、屍体。

狂気の様にも捜し求めたが師の姿は遂に無く、教室跡に残されたものは触れば音もなく崩れ去る骨灰のみであつた。

私は深い哀しみとともに思い出す。

廢墟と化した病院の床下にもぐり、苦痛を訴へる学生達に添寝して、たゞ水を与へるしか術を知らず、次々と息絶ゆる人々を見守るのみであつた當時を。

苦痛を讚美歌にまぎらして居た看護婦たち、その唱声も細くなり、やがては消えていつたことを。

そしてまた、息絶へる際の苦しみの叫びを。

あの当時の哀しみを身に泌みて味はつた人、家族を喪ひ、身に傷しながらも尙、献身の誠を惜まなかつた人が此の学園に幾人あつたといふのだらうか。

當時を憶ひ、心からの畏敬の念を捧げうるものとして、古屋野学長、高瀬前学長、佐野保教授等僅か四、五名を挙げうるにすぎないのは淋しい限りである。

(三) 教室の人々

被災直前は当教室もお多分に洩れず、教室員は次々に召集されて軍務につき、残る者は極めて僅かであった。

即ち、国友名譽教授、池田吉人教授、休職中の中村定八助教授、それに助教授としての私、戦傷を受けて帰還したばかりの高木直也君、専攻生の大原裕君、技術雇の小川作郎君、教室補助の間ノ瀬ツエ君、松尾利子君、小田文字君、清掃婦の深井ハツ君であったが、之等の中、原爆を免れた者は当日大学に居合せなかつた国友先生、大原、小田両君と私だけにすぎなかつた。

後日、幸にも遺骨を確認し、收容し得たものに池田教授と深井君のそれがあつた事は、せめてもの慰めとすべきではあらうが、他の人々の遺骨は勿論、一片の消息だに知り得ないのは遺憾の極みである。

遺族の方々も原爆で死絶へたのであらうか。

(四) 池田教授

池田教授は昭和十二年、東北大学から転じて国友名譽教授の後を継がれた明朗な先生であつた。

先生の教授としての講義を受けた第一回の学生の一人が私であり、私は卒業と同時に先生の教室に入つたのであるが、学生時代の選習生としての時期も加へると八年間の薫陶を受けたことになる。

実習の準備に、講義のそれに、泣きたい思ひの連続ではあつた。峻厳な先生の鍛へ方は故布施現之助教授の愛弟子である先生には当然であり

御自分の体験から敢へてさうされたものらしい。元々、左程肥つては居なかつたが、僅かの期間に私はみるみる瘦せ細つて行き、其年に受けた徴兵検査の結果は「兵役を免除す」であり、周囲を驚かせた。

教室での私は雑務主任であり、屍体処理係であり、実習も講義も、何も彼も私の受持であつた。「君は将来も教室に残る人だから……」と云ふのが先生の口癖であり、将来のためにとの言葉に、雑務の処理に明け暮れた日々であつた。

夜を徹して準備した実習用プレパラートが先生の気に入らず、こんなもの使へるものかとばかり窓越しに投棄てられた口惜しさに、私は憤然となり、ラボランチンは泣き出すといふ場面が幾度展開された事だらう。

この様に厳しく叩きこまれた事が、教室を主宰する日になつて如何程役立つた事か、泌みじみと師の恩を懐ふこと切である。

先生はまた思ひやりのある優しい先生でもあつた。夜更けの二時、三時、時間給水の水を自らバケツにかつがれる先生であり、酒好きの私の岳父のためには配給の酒をわざ／＼とどけて下さる先生でもあつた。

戦争も末期になつて、空襲の連続に教室に泊込みの日が続いた頃、胡瓜の一夜漬を作るのは先生の仕事であり、それを食べるのは私の役であつた。

その様な時、薄暗い管制燈の下で、研究の見通しや、教室員の仕事に關して、若し自分が死んだら……等と其時の処置を指示し、托されるのであつた。

此の亡き師の後を継いで早や八年、先生の得意とされた実験発生学の分野の研究は何一つ發展させ得なかつた自分を耻ぢる。唯、最近になつ

て台湾猿の解剖に着手出来た事を地下の先生も苦笑しながらも見守つて下さつて居る事と自ら慰めてゐる次第である。

教室の私の部屋には先生の遺影が私の日常を見守つて下つて居り、晒した遺骨は無言の指導者である。専門の分野に足を踏み入れたばかりで師を失つた親無子の私に絶へず無言の激励をおくつて下さる。師を失つて師の有難さが分る。師の無い苦しさを、佗しさを幾度、身に沁みて味はつた事か。その度毎の私の慰めは師の遺骨と語ることであり、遺影を仰ぐことであつた。

何時の日にか、亡き師の名を耻しめぬ存在となりうるのか、いまの私には重いおもい肩の荷ではある。

(五) 中村助教授

先生は変人と云はれたが眞の学究の徒であつた。私は後輩として先生に甘へ、親切な指導を受けたが、教室に入つて二年目、私が講師に就任すると前後して休職となり、外科医としての修業に入られたのであつた。そのいきさつは記さないが、権威に屈せず信念に生抜かれた尊敬すべき先輩であつた。人材の乏しきを云々される本学出身者にとつて、第二解剖の小野、呂両助教授と共に其の死は惜しみても餘ある人物である。原爆の数日前、大学の下で偶然お逢ひし、「自分は郷里へ引揚げて開業するので荷の発送も終つた。君も長崎なんかにグズグズしてない方がいいよ……」と立話しされたのが先生とのお別れになつた。

一昨年、招かれて台湾へ渡つた折、屏東近くの田舎でだつたか本学出身の康君から、原爆後、先生は天主堂近くの横穴に数日間を過され、一

人の幼児に生米を嚙んでは口移しに与へられていた云々の悲惨な話を聞かされ暗然とした事であつた。

(六) おわりに

原爆は古いものを消し去つた。何も彼も変つてしまつた。今更、学究の徒たるべきものは……と云つてみたところで愚痴としか聞えまい。それにしても偲ばれるのは亡き恩師達の偉大さであり、風格である。研究一途に情熱を捧げつくして悔いなかつた先輩の姿である。

懐しく思出されるのは、深い木立の間にボツボツと建つて居た木造教室の古びた姿であり、芝生に寝そべつては聞いた天主堂の鐘である。

亡びしものは美しきかな。

過ぎし日をかき追想し懐しむのは、既に老の徴が私にも萌し始めたせいでとすれば、亦何をか云はんやである。ペンを擱かう。

(昭三〇・六・一記す)

池田吉人教授のお遺骨

原子爆災の涙かわきもあえぬ十一月二日、漸く今の経済学部講堂で医科大学関係の殉難者慰霊祭を行つた。その時我々の職員控室に永井隆助教授が一ツの大きな白木の箱を持込まれた。これは山里小学校上手の墓地から発見されたお遺骨で、附近の者の話によると、大学関係の罹災者のものだとのことであるから拾うて持参された次第だ。打寄つて開いて見ると、風雨にさらされて大方白骨化した頭蓋と着衣の破片が收められ

ているが、誰れとも見当もつかない、そのうち上顎が総入歯であることが発見され、影浦教授であつたか、解剖の池田吉人教授が総入歯であつたぞと言ひ出した。そのうち又ハンカチーフらしい布片の片角に、洗濯屋が書入れた文字の一部が「ケダ」と読みとられた。そこで今一度頭蓋を見なおすと、なるほど池田教授の面影が伺われ、まごう方もない。

原爆の翌日ひるすぎ、大病院の焼跡の仮本部に居た私に、山里小学校の校庭から「自分は大学の池田であるが負傷しているので、救助に来てほしい」との伝言を齎した者があつた。早速学生教名が拒架を持つて出里校に行たが、夕方帰つてきて、附近の防空壕まで探したが見当らなかつたとのことであつた。

その後何の手がかりもないので、どこかへ救護班にでも運び去られ、自ら連絡もできずして死なれたか——当時そんな行方不明者が多くあつた——と思はれていた。そこで慰霊祭の日に偶然発見されたお遺骸の状況から察すると、教授は山里小学校の校庭で、救助のことを伝言されたあと、漸くうらの墓地まで自力で辿りつかれ、そこで気力つきて逝かれたものらしい。墓地に向われたのはそこが御自宅のはるかに見える地点であつたからであらうと思われる。

あゝしかし、その時御宅は已に倒潰して、奥さまと赤ちゃんは即死され、一人生残られた十一才の嬢ちゃんも佐藤純一郎助教授の宅に八月十日に引きとられて一週間目に亡くなられたのであつた。

(古屋野記)

解剖學第二教室

当時は高木純五郎教授、小野直治、呂雲龍の両助教授が勤務中であつた。

被爆時の状況

高木教授は研究室で、小野助教授は解剖学を講義中、呂助教授は研究室で被爆。

高木教授は救出され外科横穴壕で治療を受けるも終始興奮裡に十一日夕方死去さる。

又解剖学講堂の教壇に小野助教授の遺骨を確認、呂助教授も研究室にて殉死す。

故高木純五郎教授略歴

正四位勲三等医学博士 解剖学教授

明治二十九年五月三十一日岡山県に生る

大正十一年七月東京帝国大学医学部卒業

大正十二年四月長崎医科大学助教授に住ぜらる

大正十二年五月解剖学研究のため欧米に留学同十四年十月帰朝す

大正十四年十二月長崎医科大学教授に住ぜらる

昭和十年五月欧米各国に出張を命ぜられる

昭和十六年四月陸叙高等官一等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾の爆撃をうけ十一日鬼籍に入り職に殉ず